

かわら が や と かま あと
瓦 谷 戸 窯 跡

(東京都指定文化財)

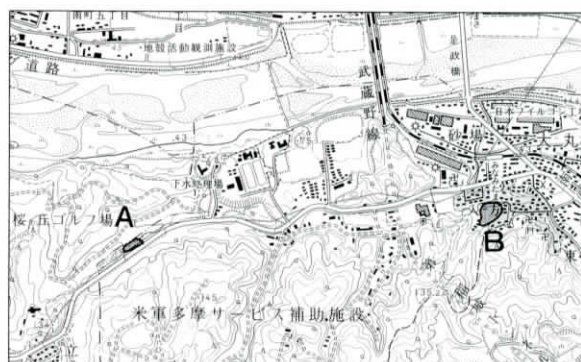
稲城市東長沼2111
☎0423-78-2111
発行 1996.10.25



瓦谷戸窯跡から出土した瓦と博

大丸地区の川崎街道に沿った火工廠多摩火薬製造所跡地周辺の谷は、昔から「瓦谷戸」という地名で呼ばれていました。これは谷戸内の丘陵の斜面から多数の瓦が発見されたためであり、すでに江戸時代から瓦を焼く窯跡があったことが知られていました。大正時代になると府道の改修工事が行われ、大量の瓦や博（床に敷いたり、壁面にはめこんだ瓦）が発見されました。この発見は、学問的にも注目されることとなり、大正12年に「武蔵国分寺瓦窯址」（東京府史蹟勝地調査報告第一冊）と題した報告が出されました。道路の改修・拡張工事はその後も続き、そのつど大量の瓦が発見されました。昭和15年にも瓦の発見に伴って「東京南多摩郡稲城大丸窯址」（考古学雑誌第34巻6号）という報告が行われています。

窯跡の調査が実施され、遺物と遺構との関係が明らかになるのは昭和31年のことです。稲城村教育委員会が主催して行われた調査では、2基の窯跡が発見され本格的な学術調査となりました。調査地点はJR南武線南多摩駅から西へ約2km、川崎街道に沿った南面する丘陵斜面にありました。重なった状態で発見された2



瓦谷戸窯跡の位置 (A.瓦谷戸窯跡、B.大丸遺跡)

基の窯跡は、地下式の段状の構造をもつ登窯でした。上にある新しい窯を1号、下にある古い窯を2号としてその内容をご紹介します。

1号窯は全長6.1mで、7つの段を有する登窯です。各段は瓦や埴の破片を埋めて補強しており、約34度の勾配をもって傾斜しています。アーチ状につくられた奥壁と地表面から約1.5mの深さをもつ煙道を残す以外は、天井部は崩れおちて形をとどめていません。燃焼室より手前の焚口部の外側からは大量の埴が積み重なって発見され、この窯で焼かれた製品の中心が方形埴であったことがわかりました。

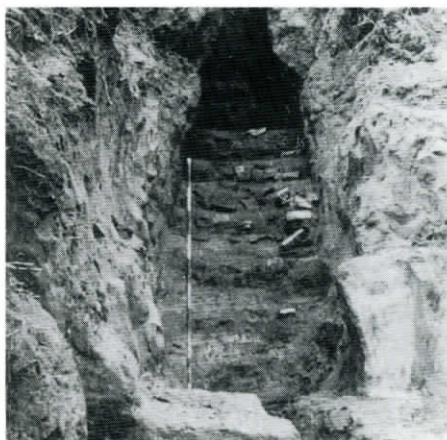
2号窯は全長5.9mで、1号窯よりやや小型の登窯です。焼成室には5つの段が認められますが、これより上部は1号窯によって破壊されているために残っていません。焚口部付近には平瓦（女瓦）の破片が多数散乱しており、この窯での製品は平瓦類であったと思われます。

これら2基の窯跡の時間的前後関係と製品の供給先について考えてみると、最初に2号窯が築かれ武蔵国分寺創建瓦の生産が始められ、後に1号窯によって武蔵国府関連の方形埴が生産されたと推定されます。

昭和54年度には東京都教育委員会によって窯跡の分布調査が行われ、1号・2号窯跡の西側に隣接して、3基の窯跡があることが確認されており、この付近が一つの瓦窯跡群であることが明らかになりました。さらに瓦谷戸の入口部に位置する大丸遺跡（多摩ニュータウンNo.513遺跡）からは15基の瓦窯跡が発見されており、火工廠多摩火薬製造所跡を含めたこの瓦谷戸一帯が、奈良時代の頃には、武蔵国分寺や武蔵国府、周辺の寺院の瓦を供給するための一大生産地であったことが判りました。



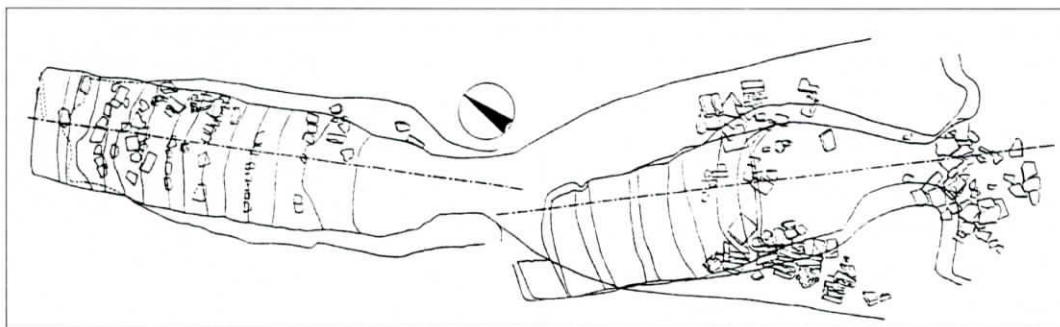
川崎街道沿いに残る瓦谷戸窯跡



1号窯の発掘状況



1号窯出土の方形埴



窯跡の平面図（左1号窯、右2号窯）